

下水流臼太鼓踊の歴史



〈下水流臼太鼓踊とは〉

毎年旧暦の8月1日、五穀豊穰と水難・火難除けの祈願をこめて南方神社・一ツ瀬川原・火の神前に奉納される下水流臼太鼓踊は、他の地区の踊りに比べてテンポがやや速く、動きが活発であり、激しい跳躍により神の魂が次第に鎮められていくと伝えられている。

踊りは鉦方4人、歌い手4人、踊り手16人が4組に分かれて踊る。4人の歌と鉦の音に合わせ「あそ」「五条」「四節」「坂金」「かせ」「小野」など、十文字・円・四列・四輪と変化に富んだ形式が次々に踊られていくところが特徴である。

起源は文禄・慶長の役の際の加藤清正の戦術にあるとされる。1971年に国の無形民俗文化財に選ばれた。

〈下水流臼太鼓踊の由来〉

臼太鼓踊りは宮崎県では山村部に多く見られるものであり、農耕作の豊穰を祈る一種の農耕儀礼でもある。この種のものは名前は違っていても、日本各地で見られる。

この踊りの始まりについては、今から400年ほど前の豊臣秀吉の朝鮮出兵にまつわる伝承が伝わっているが、これは史実性に乏しいものである。

下水流地区で臼太鼓踊りが踊られるようになったのは、江戸時代になってからだと考えられている。はっきりと年代が分かるものとしては、今からおよそ200年前の鉦が残っている。

〈西都市歴史民俗資料館の方のお話〉

従来、下水流地区の集落に住んでいる男子はすべて20歳前後になると、必ず、この臼太鼓踊りに参加しなければならなかったということです。よほどの理由がない限り、臼太鼓踊りには参加する義務があったのです。そして、だいたい40歳くらいになるまで踊るのですが、この踊りが大変難しいために他の地区から転入してきた者は、いくら練習しても容易に覚えられないので、一生、晴れの舞台で踊ったことのない者もいると言われています。

練習は旧暦7月22日に全員が集合し、人員の割り振りを行いその月の30日まで行われます。そして、新加入者はこの日に仲間入りをします。ところで、最近の高度経済成長化のために農村社会の変化、つまり疲弊が進行するとともに、全国的にも民俗芸能に関係する後継者としての青年層の減少という問題が進んでいますが、ここ下水流地区においても例外ではありません。しかし、地区の人々の熱意により人数を確保しているのが現状です。